

# 京鹿子

Copyright © 1980 by the author.  
All rights reserved.

11月号

鈴鹿呂仁

拾掬集 その三十八



鉦叩き百鬼の闇を鎮めたり  
散骨の航跡長し秋の虹  
巫女の髪束ねて黒し紅小菼  
体裁をつくろふ樹海毒きのこ  
督促てふ不意のお仕置き鴝の昼  
待宵や下五へ結ぶ恋ひとつ

オ  
リ  
オ  
ン  
へ  
白  
き  
光  
の  
一  
矢  
か  
な  
  
柿  
ひ  
と  
つ  
風  
に  
転  
ば  
す  
去  
来  
墓  
  
び  
し  
よ  
濡  
れ  
の  
蓑  
笠  
ふ  
た  
つ  
柿  
の  
庵  
  
見  
ゆ  
れ  
ば  
二  
尊  
の  
解  
く  
紅  
葉  
雨  
  
木  
曾  
塚  
へ  
虫  
の  
骸  
を  
添  
へ  
て  
や  
る  
  
蓑  
虫  
鳴  
く  
蓑  
笠  
の  
無  
き  
無  
名  
庵  
  
紅  
萩  
の  
蕪  
雜  
に  
守  
る  
や  
翁  
堂  
  
椿  
の  
実  
一  
つ  
転  
ん  
で  
旧  
街  
道

— 近 詠 —

## 萩の蝶

鈴鹿 仁



神苑の鎮もるなかの萩の蝶

こぼれ萩神のあそびの風のいろ

山の精の木霊の送る神の旅

— 追懐 —

種茄子や親の言分子の仔細〔平成十二年作〕

守るより攻める男気鷹渡る〔 〃 〕

—  
近 詠  
—

和田 照海

海桐の実

水軍の墓 鶴翼や 昼の虫

水軍の長の墓とや 海桐の実

流燈の浦の 明るき流れかな

菱の実の水は 流れず 落城址

月の出を 軋みては やす舫舟



松本 鷹根

瞑 想

蓮の実のまだ瞑想のうすみどり

風に生き影に学びて風の盆

長き夜に生きゆく道を読み返す

襪深く暮るる里山鮎落ちる

青柿落ち性善説を転がせる



## 近 詠

佛 足 跡

丹の小橋渡り浄界蜻蛉生る

佛舍利塔に複眼きかす鬼やんま

つばめ去ぬ佛足跡の大きさに

白秋や大釈尊に祈り一つ

女院御所へこゑ遠まきに法師蟬

塩貝 朱千

## 英華採集

梅雨化けてわがふる里の地獄絵図

守 口 笠 木 陽 子

今年の自然災害がもたらした惨禍は、我々の記憶に新しい。中でも毎年、必ず訪れる梅雨の季節は様々な角度から多くの俳句が詠まれている。しかし、今年の梅雨の季節は、未曾有の記録的な大雨をもたらし、各地に大きな爪痕を残すことになったのである。上五の「梅雨化けて」が、正しくそのことを言い現わしているのではないか。ふる里の変わり果てた惨状をニュース等で知った作者の胸の内は、察して余りあるものがある。震災詠もそうだが、災害詠も記憶に留める一句を成したいものである。

負ひし子の重さの記憶星月夜

奈 良 瀬 尾 千鶴枝

乳児を抱くために用いる紐や帯を「抱っこ紐」と言うが、今の若いお母さんは身体の前にして抱いているのを見かける。昔は、必ず背に「おんぶ」の形であったのを覚えているが、子を負った経験のある女性は背負うことで我が子の重さをひしひしと感じたに違いない。「負ひし子」の過去形の表現は、実に微妙であり成長した子のその後の人生に対して読み手の鑑賞を、違う方向へと導くであろう。即ち、「記憶」が「懐かしさ」となるのか、「切なさ」になるのかであり、季語の「星月夜」に委ねている。

大西日世の混濁の中継塔

奈 良 福 嶋 正 一

今の現世の混沌とした世界に憂いを感じている作者。何に救いの手を求めれば良いのか、と答えが見つからない状況下に現実を有のまま映し出し、人類共通の認識として捉える必要性を考えたのであろう。人類共通のものとして最適なものと言えば太陽である。俳句において限らない力を持つのは、季語であるが故に、大西日に現実を映し出し全世界へ発信せしめようとしたのであろう。発想の着眼に面白さがある。

# 神麓集

堂涼し 藤岡紫水

消え残る淡き朝月牽牛花  
咲くままにこぼるるままに萩の宮  
赤とんぼ休ませ慈眼野の佛  
枝豆の皿よりこぼる夕ごころ  
ことごとく襖外され堂涼し

深秋 沼田巴字

歩く背にひかり斜めや暮の秋  
銀杏落葉二月堂へは一直線  
呼ばれしは別人なりきそぞろ寒  
人の一生草の一生秋深む  
矛盾多き人の一生秋深む

秋風 丸井巴水

蝉の殻抜けぬ指輪で生きてゐる  
裏山の夕蝸は祖母との日  
鴉除けシートを捲る秋の風  
王手飛車指され月夜の底に居る  
鈴虫の庭持つ寺のガン封じ

今朝の秋 植村蘇星

九合目いよよ踏み出す土用明け  
通過点なりし米寿や今朝の秋  
老いの身となめてゴキブリたじろかず  
国道を過ぎる毛虫を見届けり  
九十九折り縁を結ぶ道をしへ



# 神麓集

川床月夜 北川孝子

みどり児の笑みも一会や花木権  
新生姜記憶の母のましろき手  
水に流すことのいくつか川床月夜  
送り火やたましひ少し青ざめて  
正論のどこか脆くて送り火消ゆ

蛩 直江裕子

終はつたとどこかで思ふ夕端居  
耳は遠いあの日のかけらカナナ真つ赤  
選択肢またひとつ減るほうほたる  
鬱の日はふうせんかづらに入りこむ  
大夕焼死んでからでも老いるのか

玉虫 高木晶子

浄域に浸り麦茶の黄金色  
川音につひに登場鮎料理  
お雛子の間合ひで運ぶ鱧料理  
玉虫や葎酒入山許さぬ碑  
梅を干す天の恵も災も

素秋の風 伊藤希眸

草結ぶことも酷暑にままならず  
瑠璃とかげ瑠璃の残像登校す  
どどつと雨奔る雷火を消すやうに  
素秋の風弥陀の御顔となり眠る  
ブルースカイさらさら泳ぐ竹の花

# 神麓集

茗荷の子 奥田筆子

茗荷の子 釈迦は腋より生誕す  
伊吹山墓も福助も平謝り  
木下闇利口な狐騙さない  
頭脳流出 関空線のキャベツ畑  
雑居ビルいつも今頃になにく香

潮騒 井上菜摘子

失礼のないやう合歓の睡るまで  
潮騒や日傘の中にゐて眠し  
青春の混沌へ置く青林檎  
思ひ出やはんざきの眼を置き去りに  
はんぶんはわが身の洞へ水を打つ

鈴の緒 村田あを衣

秋思かな歪な真珠身につけて  
秋蝶の一光体となる蒼さ  
露草の露にぬれつつ祇王訪ふ  
鈴の緒は母の手ざはり紅小萩  
行きづまる推敲木の実降るばかり





# 京鹿子集

## 鈴鹿呂仁選

堰越ゆる水音の綴る晩夏の詩

京田辺 山中志津子

木槿垣濁世の風を寄せつけず

風語りして夕顔の開くまで  
ジョーカーを握つてぬさう夏の雲

城陽 鷺山 珀眉

門火いま被災の魂の道しるべ

履歴書に書けない履歴氷菓溶け

噴水や本音の出口ご自由に  
酢漿草の陰日向なく接しをり  
鉛筆の濃さは変らず河童の忌

父母は杵と臼かも土用餅

晴れときどきひとり木槿の花盛り

京 都 井尻 妙子

三伏のひかり束ねて数珠屋町

身を守る入口さがす土用照り

行列のうしろが溶ける宇治氷

夏雲や乗り継ぐ旅の途中駅

一歩づつ打ち水の香の変わりゆく  
足裏より砂崩れゆく晩夏かな  
時計草銀河鉄道のとき刻む  
アルゼンチンタンゴ涼しき石畳  
折鶴の傾ぎ気になる夏の果

京 都 片山 熙子

終戦日家々の窓灯かな

福 山 亀井 福恵

語り部の唐突の黙ひろしま忌

居住まひにあり羅のよりどころ

睡蓮や水の平らに心字池

京の路地夏には夏のたたずまひ

白日傘聞きたき言葉風さらふ

魂送り終へしそびらの水の音

花木檀音の消え去る機の街

思ひ出に折り目をつける晩夏かな

赤の他人と言ひつ絡まる凌霄花



水引草江戸へ百里の京下り  
溪谷の碧を尽くして秋に入る

大西日世の混濁の中継塔

何時よりか西日の部屋を物置に

俎板に滲む紫茄子料理

きゅきゅきゅ洗ふ茄子の紺明か

外つ国より青葉の京に里帰り

白南風や劈く一機空の青

祖父帰宅唸るは黒の扇風機

塔頭の梵鐘重き夏椿

白南風や鳶軽やかに寺屋敷

半割のメロンの底の甘露かな

図書館の回り取り巻く蟬時雨

蒸暑き夜に輝く大火星

ふらここに長髪揺らす児爺看守

打水は爺の日課や狭き路地

音頭取り宙舞ふ如し鉾巡行

車窓には無人の田畑炎天下

どどドンと憂さも吹き飛ぶ大花火

野分来て高温ひやり季動く

門口に新盆の母立つてをり

八月の鎮魂つづく祈りの日

福嶋 正一

アリソナ 伊吹 之博

酒 田 藤波 松山

さいたま 神田 惣介

戸 田 遠山 悟史

梅雨化けてわがふる里の地獄絵図

守 口 笠木 陽子

不可思議の神の胸うち連咲けり

病みしかば子等寄り夏の発散会

宇宙力浴びてすつくと日回り草

負ひし子の重さの記憶星月夜

み吉野の水の締めたる新豆腐

奈 良 瀬尾千鶴枝